

薬物依存症からの「回復」の再考

－ ライフストーリー・インタビューによるアプローチ －

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
臨床心理学領域
川福 理沙

本研究の目的は、薬物依存症からの「回復」について調査し、その点について再考することである。先行研究では、薬物を使わない生活を選択し続けることを「回復」と呼んでいる。「回復」とは元の状態に戻ることが指すが、彼らは薬物を使わなくなってもそれへの欲求がなくなることはなく、この点を無視した表現であるといえる。そんな彼らの状態を、本研究は「回復」とは別の言葉で表現したい。そこで、薬物依存症の自助グループである NA や ダルク (DARC) で出会った、薬物を使わずに社会で働きながら生活している薬物依存症者 3 名 に、ライフストーリー・インタビューを行った。彼らの語りから、薬物依存症からの「回復」とはある状態に至ることではなく、彼らが死ぬまで続く過程であることが分かった。彼らは薬物への欲求にいまも苦しんでいる仲間を助けたいと思い、人生の目標を持ち、再使用のリスクがあることから「今この瞬間」を懸命に生きていることが分かった。さらに、なにか生活上で起きた問題に直面する度に、薬物使用といった自分で対処しようとする今までの習慣ではなく、他人に相談するといった新しい問題解決法を習慣化しよう、経験を積み重ねる努力をしていた。つまり、薬物依存症からの「回復」とは、成長しようともがきながら、自分にとっての「善き人生」を目指す過程といえる。